

ダンディはお洒落のみにあらず

増尾弘美

人文社会科学研究所助教授

はじめに

ダンディ dandy という言葉から何を連想するだろうか。とびきりお洒落で拳動も洗練された男性という、外面的な特徴をとらえた答えが返ってくるに違いない。内面的なことが問題になるとしても、「ダンディは気の利いた会話ができる」程度の認識になりがちである。では、果たしてそう言い切れるのだろうか。

さて、この語は19世紀のフランス文学史に瞬間的に登場する。文学史でよくお目にかかる「ロマン主義」や「自然主義」といったメジャーな概念とは違って、表立っては現れず、地下水脈のようにあちこちに潜在している。だからダンディの実態はとなると、なかなか全貌が見えてこない。そこでこの「漫筆漫歩」なるエッセイの執筆を依頼されたのを好機に、ダンディズムについてじっくり考えてみることにした。

ダンディズムの発祥とフランスへの伝播

ダンディはもともと英語であり、ダンディズム dandyism 発祥の地も、イギリスである。19世紀初頭、イギリスの上流階級で、服装その他の美的センスにおいて洗練を際限なく追求し、最高度の粋を自負する青年たちが現れた。彼らの身に付ける色は黒、灰色、紺、茶色など、地味な色に限られていた。筆頭者ジョージ・ブランメルに言わせれば「人目を引かないのが本当のお洒落」なのである。彼はオックスフォード大学入学前には既にボー・ブランメル le Beau(伊達男)Bunmellの異名を取るまでになり、平民出身であるが、プリンス・オブ・ウェールズ、後のイギリス国王ジョージ4世に見出され、軍人として迎えられる。それをきっかけに、人並みはずれた優雅さと媚びない大胆さとをもの見事に同居させた立居振舞い、そして常人を寄せ付けぬ繊細な趣味で、社交界において一世を風靡する有名人

となる。それはブランメルの後にも先にも真のダンディはいない、と言われるほどの徹底ぶりであった。一般にスノップは粋を模倣する。しかしダンディは逆に粋を創造するのだ。模倣する側と模倣される側と、その差は天と地ほどの開きがある。

ダンディズム（仏語では、ダンディスム dandysme）は、フランス革命のためイギリスへと亡命し、帰国した貴族を介して王政復古の頃にフランスに伝わった。亡命貴族シャトーブリアンや、ロマン派の反逆児と言われたミュッセがこれを実践する。ダンディを教義として紹介したのはボードレールとバルベール・ドールヴィイである。ボードレールの批評『現代生活の画家』の第9章は「ダンディ」の項目に割かれている。バルベール・ドールヴィイは『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』を著した。しかしもともとフランス人は社交精神が旺盛で、常に人を楽しませようという本能的なものがあるので、英国のダンディほどクールさに徹底しきれなかったようだ。さらに、本物のダンディは言動や立居振舞によってダンディズムを体現する「演劇人」だから、紙に書かれた作品という形で自らの痕跡を残す文学者は、ダンディ的な要素をもつことはできても、究極のダンディにはなれないということになる。

精神の貴族、ダンディ

ダンディが登場した時代背景を考えると、おのずとダンディズムも理解できる。少数の貴族に支えられた王政が市民社会の到来と共に終焉を告げ、産業革命を経てブルジョワが台頭してくると、物質主義や俗物根性がまかり通る。進歩への信仰が蔓延すると、それに疑義を差し挟む人間が現れてもなんら不思議ではない。民主主義という仮面をかぶった平等主義は、芸術や美学を広く大衆に知らしめるという啓蒙のメリットを有する一方で、それらを俗化させてしまうというデメリットも併せ持つ。かつて一部の貴族が享受していた特権意識を精神の面で継承したのがダンディズムと言えるだろう。ダンディとは精神の貴族なのだ。凡庸なブルジョワは歯牙にもかけない。ボードレールに言わせれば、「貴族制が完全に崩壊するに至らず、まだ絶対ではない過渡期の時代にダンディズムは発生する」、あるいは「ダンディズムは頹廢期（デカダンス）における英雄主義の最後の輝き」ということだ。寸分違わず同じ物を膨大に作る大量生産と、他との違いを際立たせ、「オンリー・ワン」に徹するダンディは相反するものである。ダンディは決して大量生産できない。個性を譲らず、孤高な態度を守り続ける。ダンディは群れることがない。秘密結社のように見えないところで連帯感

をもつことはあっても。

ダンディはお洒落であるが、飽くまで控え目をモットーとし、奇抜であってはいけない。でも見る人が見ればわかるという、通だけにわかる波動でオーラを放ち続ける。ダンディはあるがままの自然を愛するよりも、技巧を凝らした人工性に執着する。新たな生命を育む女性は、男性よりも自然に近いから、ダンディは女性を嫌悪する。だからダンディは本質的に独身男性だ。愛妻家や家族サービスなどという言葉とは無縁である。

ダンディは情熱的に語るということをしなない。無感動性 *impassibilité* の姿勢を保つ。それゆえ、今なお英雄としてフランス国民の心に君臨する人道主義的政治家であり文学者であるユゴーは、ダンディになり得ない。ロマン派の時代にあつて、ロマン派特有のあからさまな抒情性を受け入れられず、醒めた冷静さを保って作品を綴った文学者たちにダンディズムが認められる。彼らは意識的にであれ、結果的にであれ、ユゴーとは一線を画すことになる。共和派であるか否かは別として。ダンディはウィットに富み、警句を効かせ、毒舌的な皮肉を浴びせ、周囲の空気を攪乱する。ブルーストの『失われた時を求めて』の登場人物、シャルリュス男爵のモデルであるロベール・ド・モンテスキウや画家のホイッスラーに見ら

れるような、すべてを見下した侮蔑的態度、傲岸不遜な態度には驚くばかりだ。

ダンディは恐ろしく禁欲的で、自己を克己し続ける不断の意志に貫かれた完璧主義者だ。苦行僧の趣きさえある。傲慢なまでのナルシズムに溺れているかと思いきや、実は厳しい自己統御の精神を終生保っている。「ダンディは鏡の前で生き、死ななければならぬ。」とボードレールが言うように。

歴史的に見て、ダンディが19世紀後半の唯美主義に貢献したものには、多大なものがある。唯美主義を深めたワイルドも、彼が創り出したドリアン・グレイなる人物もダンディだ。Dorian なる固有名詞には、Dorien (何でもない) が連想できないこともない。ダンディは芸術至上主義、デカダンスを経て世紀末、そしてアール・ヌーヴォーやアール・デコが絶頂を極めるベル・エポックへと至る、文化の爛熟期の推進役だ。

異国趣味のダンディ、メリメ

ダンディは常に他人と自分を差別化することを図るから、異国趣味——19世紀後半に流行した日本趣味 *japonisme* もその一環である——をもつことが多い。一般人の手に届かないものを旺盛な知識欲を駆使して、進んで採り入れるのである。銜学趣味がある時は前面に打ち出し、またある時は隠し味に使い、二重にも三重にも人を煙に巻

くことを楽しんでいた。言うなれば韜晦趣味である。意外性で衝撃を与えるのがダンディのやり方なのだ。

ここでビゼー作曲の有名な歌劇『カルメン』の原作者で、ダンディの一員であるメリメ Prosper Mérimée (1803-70)を紹介したい。意外にも、彼は古典語及び諸外国語に堪能な考古学者であり、文学では自称アマチュアであった。文化財保護監督官としての巡察旅行の経験を存分に生かし、彼の作品は異国趣味のオン・パレードであり、とりわけ『カルメン』の末尾の章はジプシーに関するペダンチックな学問的解説となっている。歌劇にとっては無用の長物であるが、これこそメリメのメリメたる所以である。さらに、最初に出版した『クララ・ガスル Clara Gazul 戯曲集』はスペインの女優クララ・ガスルの戯曲の翻訳と見せかけた創作だった。巻頭の肖像はというと、彼女の模写に見せかけて、実は頭巾を被り、肩を露に出し、首に金の十字架をつけたメリメ自身であった。続いてイリリア民謡集として『ラ・グズラ La Guzla』を出す、これも翻訳に見せかけた彼の創作だった。おまけに、前者のGazulと後者のGuzlaが、アナグラムであることは言うまでもない。こんな調子で、彼は次から次へと人を煙に巻いてしまうのである。冷徹な明晰さと慇懃さと完璧主義をもって。

おわりに

これをきっかけに、辛口の皮肉と毒舌を得意とする人が、その原因を自分の中に潜むダンディズムに見出すかもしれない。しかし、ダンディはあからさまなひけらかしを嫌うから、正面切って名乗り出たしまえば、たちまちその瞬間に「プチ・ダンディ」として格下げさせられるという憂き目が待っている。そして何よりも恐るべきことは、真のダンディには、自らが発した毒の矢をブーメランのように我が身に受けて、壮絶な最期を遂げるという運命が待ち受けていることだ。ダンディの好む「黒」は一見、「無」のようでありながら実は自らの発する光さえも吸収してしまう、超高密度のブラックホールのような。冬の冷たい夜空を眺めるがごとく、凡人はダンディに憧れつつも仰ぎ見ることしかできない。

(ますお ひろみ/フランス文学)